

サマセット・モーム著『Red』と日本語訳『赤毛』の 一読者による比較検討

- インターネットが変える翻訳事情と自学自習 -

綾 皓二郎*

Email: aya.k2015h27@gmail.com

*: みやぎインターカレッジコープ

◎Key Words 翻訳, 差別用語, 国立国会図書館デジタルコレクション

1. はじめに

確かな翻訳には一語一語、一文一文を正確に読み解く「精読」を必要とすると言われている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。本報告では、Somerset Maughamの短編『Red』を取り上げ、計6人の翻訳者による日本語訳『赤毛』の訳語・訳文をWeb検索や辞書等を活用して読み比べてみた。これにより、「精読」と翻訳について多くの疑問点や問題点が見出せたので、さらにインターネットがもたらした翻訳事情と自学自習の変化が確認できたので、報告する。本稿は、非専門家である一読者による、限られた調査結果と検討、および率直なコメントから成り立つ。

2. 原著『Red』の日本語訳『赤毛』『レッド』

『Red』は、短編集『The Trembling of a Leaf』(1921)に収められている。テキストは、パブリックドメインになっており、Project Gutenbergなどからダウンロードできる。検討の対象とした日本語訳『赤毛』を出版社の発行順に記す(年齢は発刊時のもの)。(a) 半崎 辛訳(虹書房 1957, 32歳) (b) 厨川圭子訳(角川文庫 1957, 33歳) (c) 中野好夫訳(新潮文庫 1959, 56歳) (d) 朱牟田夏雄訳(岩波文庫 1962, 56歳) (e) 中野好夫訳(新潮文庫 1994&2012 改版) (f) 小牟田康彦訳(近代文藝社 2015, 74歳)⁽⁴⁾ (g) 行方昭夫訳(DHC 2015, 84歳)⁽³⁾。『Red』の最初の翻訳は、中野(37歳)による1940年刊行の岩波文庫版であり、戦後最初の再版はモーム選集に収められたものである⁽⁵⁾。(c)は誤り等を修正して新字体、新仮名遣いに改めたもので、(e)は(c)の改版で差別用語を差し替え、一部の語句を修正し字体を大きくしたものである。なお(f)のみ、訳題は『レッド』である。

3. 疑問/違和感のある訳語・訳文

3人の英文学者による日本語訳『赤毛』の訳語・訳文の主な疑問点/違和感を「精読」の観点から指摘する。より適切と思われる訳を → ○○(訳者名)で示す。

3-1. 中野好夫訳 新潮文庫 2012年68刷改版

- p.109 石油の香り, コプラの香り: 「猛烈に鼻をついた smelt strongly」のは、香りでなく臭いではないか。
p.114, p.145 バンガロー bungalow: バンガローでは日本

人の描くイメージは南海の島の建物と大きく異なってしまう(ウキペディア)。→ 平屋(小牟田)

p.123 この島へ来て, p.149 島の連中は: the islands_は複数形で訳しておかないと、小説の筋がまったく通らなくなる。この島に来て三十年になるのに、船長が昔の恋人のその後について何も知らないということはあり得ないであろうから。「精読」では、「名詞が単数形か複数形かといった細かいことを読み取らないことには文章を読んだことにはならない」⁽²⁾との指摘がある。→ ここの島島へ来始めて(半崎), この辺りの島では(半崎)

p.133 frugal meal つつましい食事(1940版から): つつましいとは、控えめにして目立たないの意で、これを節儉につとめた意に使うのは誤用(岩波国語辞典第7版)。「つましい食事」が正しい。

p.144 期待していた: 本人は、彼女が断ることを「期待」していたわけではない。→ 予期していた(半崎)

pp.147, 149 老衰: 50歳前の女に老衰は適切だろうか。

3-2. 朱牟田夏雄訳 岩波文庫 1993年第17刷

p.81 ボートではこぼれた was rowed: 船長は年をとっても病人ではないのだから、受動態で訳さない方がよいと思われる。→ ボートを漕がせて(厨川)

p.81 秩序整然と with an ordered formality: これでは訳が重いと思われる。→ 大体一定の間隔をおいて(半崎)

p.82 ひとが自分を見まもっていることには anyone → 誰かに見られているとは(小牟田)

p.84 『土曜夕刊新聞』 Saturday Evening Post → 後述
pp.84, 85, 90 ~かしら: 主として女性のことば。老年の男、しかも一人は粗野な男の言葉としてはおかしい。

p.87 あの世にひっこし pass into the darkness: 死ぬを婉曲に訳すとしても、「あの世にひっこし」は適切だろうか。→ あの世に旅立つ(半崎)

p.90 人間はわしも知らない。I never knew him personally: 人間は知らないでよいか。文脈から「わしも」もおかしい。→ 個人的な知り合いではない(小牟田)。

p.96 やっと冒険にふみ出し risk it: 細い橋を渡ることで冒険は大げさであろう。→ やっと思い切って(半崎)

p.96 つつましい食事 → 前述

- p.97 マイナー鳥が、にぎやかな声でココヤシの木立を一ぱいにしていた：訳が教室英語的 → 椋鳥がココナツの林の中で、かしましく囀っています。(厨川)
- p.98 whole-heartedly 全心的に：新語でもない語に訳語を創っているが、現在までの英和／国語辞書に採録されていない。→ 真心からの一すじな (厨川)
- p.99 ポチャポチャ漕いで、p.100 ポチャポチャと海岸まで：ポチャポチャは訳として要らないと思われる。
- p.99 何か協定が成立したらしい agreement：この文脈で協定が成立は大げさ。→ 合意に達した (小牟田)
- p.101 このかぼそい小さな橋を slender, p.107 かよわい橋：丸太を渡しただけの橋をかぼそいとか、かよわいとか、形容するのは適切ではないと思われる。
- p.101 民族 → 種族, p.101 女ってのは → 後述
- p.103 むかしの習慣の力で Old habit was strong in him → 昔の習慣は根強いもので (厨川)
- p.104 暇つぶしにもなる occupation → 後述
- p.105 自分自身を空想した fancied himself：訳が教室英語的 → 心に描いてやまなかった。(半崎)
- p.105 同棲を求めた。内妻になる。→ 後述
- p.106 心の奥の院 sanctuary → 心の聖域 (小牟田)
- p.107 習慣と便宜のきずなだけにむすばれて bound by the ties of：この文脈で、日本語としても「きずなだけに」は適切か。→ 習慣と便宜にしばられて (厨川)
- p.107 黒の簡単服 → 後述
- p.110 無気味にゲラゲラ笑い出し mirthlessly：文脈からゲラゲラ笑い出しは疑問である。ゲラゲラは不必要な擬声語。→ 淋しく笑いはじめた (半崎)
- ### 3-3. 行方昭夫訳 DHC 2015 年第3刷
- 翻訳『赤毛』は『Red 英文精読術』⁽⁵⁾の全ての語釈、試訳、決定訳、解説の後に、別立てで収められている。
- p.3 concertina アコーディオン：手風琴 (中野訳、朱牟田訳) では古い感じがするが、アコーディオンとしてよいだろうか。→ コンサーティーナ (小牟田)
- p.3 敢えて言えば幼稚だとさえ言える。One might almost say childlike：強すぎる表現になっていないか。→ 子供もつばいと書いてもいいものだった (小牟田)
- p.4 恐る恐る梯子を下り stiffly：年を取り太った船長には、勝手知ったる船の梯子でも、降りるとなると動きはなめらかとはいかなかったのではないか。→ ぎこちない格好で、梯子を這い降りると (厨川)
- p.5, p.19 バンガロー → 前述
- p.5 土曜週刊誌 Saturday Evening Post：イタリックは商業雑誌名を示す。→ サタディ・イブニング・ポスト
- p.7 死ぬ pass into the darkness：婉曲表現を直接的に訳すことは適切か。→ 暗いあの世に消え入る (小牟田)
- p.12 島に来たのは、・・・南海諸島に・・・島が見舞われて：一文に「島」が3回も出るのは落ち着かない。→ the South Seas 南海に (小牟田)
- p.13 タバコをパンダナスの葉で巻いて、・・・娘が作っ

- てくれたタバコ：一文の中でタバコを2回繰り返すのではなく、原文に即して tobacco と cigarettes の意味を区別して訳すほうが適切と思われる。
- p.16 あの手の女どもは what happens to them：「この them は島の娘たちを漠然と指します」と語釈にあるが、この文の前に「他の白人と仲よくなりましたよ」、後に「ニールスは憎悪の眼差しを相手に向けた」とあるので、文脈を読み取れば them はニールスのような白人をも含むと解したほうがよいのではないかと思われる。→ やつらはみんな (半崎)
- p.18 いい運動にもなるだろう occupation：語釈で職業ではないとするが、運動でも前前文 (収入) および前文 (椰子の木の栽培) とうまく繋がらない。他に [生計をたてる] 仕事 (英辞郎), work という意味もある。p.6 で、椰子の木々がかかなり儲かることが述べられている。コンテキストから考えると → それが仕事になる (厨川)。それが収入源になる (小牟田)
- pp.19, 20 結婚, 求婚, 同棲：原文は平易な表現であり、この文脈で硬い表現の漢語訳は適切とはいえないのではないかと思われる。→ 一緒に住む, 申し出を受ける, 所帯を持つ (小牟田)
- p.19 プラトニックな愛：彼に肉体的欲求はなかったとしても一方的な very pure love (原文は Platonic ではない) にプラトニックはふさわしい訳といえないのではないか。→ きわめて清純だった彼の愛 (半崎)
- p.21 あたりを威圧するような commanding：くつろぎ着を身につけた肥満気味の土地の老女 (p.22) とされる女があたりを威圧するような雰囲気を感じさせるだろうか。→ 堂々とした身体つき (厨川)
- p.21 簡単服 Mother Hubbard：Wikipedia によれば, It was introduced by missionaries in Polynesia to "civilise" those whom they considered half-naked savages of the South Seas islands. とある。画像検索すれば、元々「妊婦服」というわけではないことが見て取れる。裾が長くてゆるい家庭着のこと。簡単服でわかるのは、昭和の世代までであろう。→ 寛衣 (半崎)
- p.22 娘時代 of her youth：同棲していた時代を、娘時代とすることでよろしいか。→ 若い時 (厨川)

4. 『Red』『赤毛』に認められる差別用語

原著には (少なくとも現代では) 差別用語とみなされる native, Chink, savage, half-cast などが使われている (native は計 19 箇所に出てくる)。native は軽蔑の意を含んで使われるので、まったく受け入れられないとする辞典がある⁽⁶⁾。差別的でない語 (politically correct) として、代わりに indigenous がよく使われる⁽⁷⁾。

native は、翻訳版ではほとんどは「土人」と訳されている。翻訳版 (者) には当初から差別的な意識はなかったとしても、今日の観点からは差別用語として意識され認知されている訳語が、他にもかなり含まれている。

4-1. 中野訳 (1959) に見られる差別用語

土人, 酋長, サモア土語, 支那人, 白痴, 気違い, など。native の訳語として土人を用いるだけでなく「Kanaka→カナカ土人」など, 原文にはない土人を補っている訳語が計7件ある。朗読 CD 版 (1990 年) では土人が原住民に改められている⁽⁸⁾。朗読で土人という言葉が繰り返されることに違和感を覚えて差し替えたと推察する。新潮文庫版では, 中野の没 (1985 年) 後, 1994 年の改版で「土人→原住民, 支那人→中国人」に差し替えられたが, 同年発行の中央公論社版では差別用語が, 新潮文庫 1959 版のまま残っている⁽⁹⁾。

4-2. 朱牟田訳 (1993) に見られる差別用語

カナカ土人, 酋長, 土人, どもくら, シナ人, 痴呆, 気持ちが, など。著書『英文をいかに読むか』(文建書房, 1959 年, 2010 年 67 刷) には『Red』の一節が取り上げられていて (pp.68-70), 解説には「土人の少女, 土人の小屋」とある。同書は全国学校図書館協議会選定図書に選ばれているが, 選定基準 (1980 年制定, 1988 年・2008 年改訂) には, 1. 内容に「人権尊重の精神が貫かれているか」, 2. 表現に「差別的な表現がされていないか」という項目があることに留意したい。

4-3. 差別用語の出現度数と翻訳者の人権意識

『赤毛』『レッド』で, 「土人」「支那人」という言葉の出現度数を訳者別に調べた結果を下の表 1 に示す。

差別用語	半崎 1957	厨川 1957	中野 1959	朱牟田 1962	中野 1994	小牟田 2015
土人	20	11	24	22	0	0
支那人	0	2	2	2	0	0

翻訳には翻訳者の当時の人権意識と時代による人権感覚の推移が反映されていると考えられる。厨川には女性としての繊細さが伺える。中野は戦後の「進歩的文化人」を代表する人物であったし, 朱牟田は東大教養学部長 (1960~1962) という要職を務めた教育者でもあったが, 兩人にはおそらく生前 (朱牟田は 1987 年没) は, 差別用語を用いている/正そうという意識はなかったのではないかと, 増刷をみるかぎりでは, 想像される。2015 年の小牟田訳と行方訳には, 「土人」「支那人」の差別用語はもはや使用されていない。なお, わが国で「土人」という言葉が公的に使用された例に『北海道旧土人保護法』がある。制定が 1899 年で, 長い差別運動の末, 廃止されたのが 1997 年である。

4-4. 辞書における「native」「土人」の取り扱い

(1) 英和辞書における「native」の訳語

『簡約英和辞典』(1947 年第 5 版) に, 土人, 未開人が載せられている。『研究社新英和大辞典』(1980 第 5 版) では, 3 [しばしば軽蔑的に] (通例, ヨーロッパ人の立場から) 土着民の, 原住民の, 土人の, とある。2002 年第 6 版では土人が消えている。『リーダーズ英和辞典』は 2012 年第 3 版になって, 土人がなくなった。

だが, ほとんどの英和辞書では, 土人という訳語は 1980 年代から差別用語として認識され載せられていない。

(2) 国語辞書における「土人」の語義

広辞苑 (1976 年第 2 版補訂版) では, 2. 未開の土着人。軽蔑の意を含んで使われた, とある。このように国語辞書では 1970 年代の後半から差別用語とみなす語義を記載している (新明解国語辞典他)。

5. 訳題『赤毛』は適切か

原題は『Red』であるが, 訳題は, 小牟田の『レッド』の他は, 『赤毛』である。しかし, なぜ『赤毛』かの説明が翻訳者からまったくなされていない。小牟田は, 『the Trembling of a Leaf』の訳題が中野らの『木の葉のゆらぎ』ではモームが意図した意味が伝わらないとし, 『一葉の震え』⁽⁴⁾と訳している。ここでは『赤毛』では, 同様にモームが意図した意味が日本人読者に的確に伝わらないことを, 読んだ瞬間に何を言外に意味しているかイメージしにくいことを指摘する。主人公の若者は flaming hair, red-haired の故に Red と呼ばれたが, なぜ題目を『Red』としたのか, モームの意図を音素 /r/ の音象徴と red の語感から推測する。

色としての red は, 何よりも若い二人の熱烈な恋と愛を象徴している。red rose は愛のシンボルである。また, /r/と red はこの若者のエネルギーで力強い振る舞いや身体のとくましさを連想させる。国旗の赤は, 熱情と勇気, 力強さの象徴である。他方で, /r/と red はネガティブの意味で, 教養のない船長の怒りっぽくて粗野な性格をイメージさせることにも役だっている。

そこで, 訳題としては『赤毛』よりは, 原題のままの『レッド』のほうが適切と考えられるのである。このように訳題といえども小説全体の文脈をも考慮して決めなければならないということが示唆される。宇都出は, タイトル (書名) はその本のコアであること, 英文を楽に読むためには単語力と文法力に加えて「文脈力」を活用することが大切であると指摘している⁽¹⁰⁾。

6. インターネットが変える翻訳事情

日本における訳業の特色として「外国では, 訳業をひとりの専門家または一つの大学内の私有財産にしておこうとするような, 学者仲間からの圧力がない。日本の現状では訳の批評は実際上不可能である。若い人が先輩の誤りを指摘することはできないし, ほかの大学の先生の誤りを取り上げることもしにくい」⁽¹¹⁾という指摘がある。ここで, モームの作品の翻訳にそのような傾向があると言い切ることは慎重であってよいと思われる。しかし, 「朱牟田先生は英語訳読において日本の英文学界で最高の方」⁽¹²⁾, 「名翻訳家」⁽²⁾と賞される一方で, 朱牟田訳『赤毛』には対訳学生文庫⁽¹³⁾に多少手を入れた (「解説」p.177) ものであるためか, 行方のいう試訳⁽³⁾のレベルが少なくないことが判明し

た(3-2)。また『英文をいかに読むか』には誤訳・悪訳が多すぎるとの指摘が大学の外からある⁽¹⁴⁾。「文学というものがもっとも洗練された言語表現である」⁽¹⁵⁾とすれば、訳文も洗練された文学的な文章であることが望まれる⁽²⁾。せめて自然な日本語であってほしい。

朱牟田訳の出た後に『赤毛』を収録した世界文学全集は8社(重複を含む)から刊行されているが、それらはすべて中野訳である。これは朱牟田訳の出版社/編集者による評価を示唆するものといえよう。

また、インターネットがない時代の翻訳について、「翻訳界の最大のガンは批評の不在だと思う。どんなひどい翻訳を出しても、今は誰も何も言わないし、言ってもそれほど影響力があるわけではないから、当の出版社も翻訳者も平気でいられる」⁽¹⁶⁾という指摘もある。しかし、今日ではインターネット上で誤訳かどうかを質すなど、翻訳の質を批評し議論することがごく普通のことになっている。たとえば、東京大学の野崎歓による翻訳『赤と黒』(光文社古典新訳文庫 2007)に、誤訳が多すぎる「前代未聞の欠陥翻訳」との立命館大学の下川 茂による書評があり、ネットでも公開された⁽¹⁷⁾。この例が示すように、翻訳に関する議論がネット上で盛んに戦わされており、もはや訳者も出版社も無視できない翻訳事情となっているといえる。

『The Trembling of a Leaf』がパブリックドメインになりインターネット上で公開されたことで、訳業の「しがらみ」が解けたのか、この短編集に画期的な翻訳が現れた。履歴からは英文学の研究者とは言いがたい小牟田が一人で原著全八編の完訳『一葉の震え』⁽⁴⁾を上梓したのである。小牟田はあとがきに、「原著で初版以降これらが一つにまとめて出版されている事実はモームの思いを反映しているはずであり、読者にそれをそのまま届けるのが最善だと判断した」と述べている。

翻訳物は総じて40~50年前後で賞味期限が切れると言われている⁽⁴⁾。社会の変遷とそれに伴う日本語の変化は激しいので、50年も経過すれば、使われた言葉が適切でなくなってきたり(たとえば『赤毛』の「土人」)、表現の古さが目につくようになってくる。こうした例として、内藤 濯訳『星の王子さま』(岩波書店、1953)をあげることができる。独占翻訳権が50年以上も続くことは読者にはメリットがない。『星の王子さま』の著作権の保護期間が2005年1月に満了して以来、20数者(社)から新訳が出ていることは記憶に新しい。ただし、これらには誤訳が多いとの指摘がある⁽¹⁸⁾。

7. インターネットが変える自学自習

Web 検索の発達で情報が容易に入手できるようになり、テキストの不明な箇所や疑問点を自ら調べ出すことができるようになったことは、読者にとって大変ありがたいことである。これにより、辞書の説明や訳者の注釈を超える知識が得られることが少なくない。特

に画像検索と英語検索は役に立つことが多い。

国立国会図書館はデジタルコレクションの送信サービスを2016年1月から始めている。これは国立国会図書館がデジタル化した資料のうち、絶版等で入手が困難な資料について、公共図書館・大学図書館等にデジタル画像を送信し、各図書館で画像の閲覧等ができるようにするものである。これにより、誰もが必要な文献調査が容易に行えるようになった。この報告における中野訳岩波文庫版(1940)、半崎訳『赤毛』(1957)は、このサービスを使って宮城県図書館で調べた。

8. おわりに

錚々たる英文学者が総語数9000弱の短編『Red』を「精読」の方法⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾で翻訳しても、疑問/違和感のある訳語・訳文が少なからず見いだされることがわかった。これは「精読」(正確な英文解釈)の難しさを、完璧な翻訳を求める難しさを示唆している。

参考文献

- (1) 行方昭夫：“英文の読み方”，岩波書店(2007)
- (2) 齋藤兆史：“翻訳の作法”，pp.87,163,15, 東大出版会(2007)
- (3) 行方昭夫：“東大名譽教授と名作・モームの『赤毛』を読む 英文精読術”，DHC(2015)
- (4) 小牟田康彦訳：“一葉の震え”，pp.123-157, 4 レッド 近代文藝社(2015)
- (5) 中野好夫訳：“モーム選集第7巻”，三笠書房(1951)
- (6) Nigel Rees 著/脇浜義明訳：“差別語・婉曲語を知る英語辞典 The Politically Correct Phrasebook”，明石書店(1996)
- (7) Marilyn Schwartz 著/前田尚作訳：“バイアスフリーの英語表現ガイド Guidelines for Bias-Free Writing”，p.28, p.128, 大修館書店(2003)
- (8) 中野好夫訳：“赤毛”朗読CD版，学習研究社(1990)
- (9) 中野好夫訳：“世界の文学セレクション36 モーム”，中央公論社(1994)
- (10) 宇都出雅巳：“使える英語は「読む」から身につく 英語楽読法”，p.50, 大和書房(2013)
- (11) グロータース著/柴田 武訳：“誤訳—ほんやく文化論”，p.178, 三省堂(1967), p.182, 五月書房(2000)
- (12) 行方昭夫：“英会話不要論”，p.148, 文藝春秋社(2014)
- (13) 朱牟田夏雄訳：“赤毛—対訳 Somerset Maugham”，南雲堂(1960)
- (14) 柴田耕太郎：“続 誤訳に学ぶ英文法 第30回” http://www.id-corp.co.jp/english_grammar/eg2009sept2.pdf
- (15) 齋藤兆史：“英語の教え方学び方”，p.6, 東大出版会(2003)
- (16) 別宮貞徳：“翻訳と批評”，p.248, 講談社(1985)
- (17) 下川 茂：“書評—『赤と黒』新訳について” 日本スタンダード研究会会報, No.18(2008) http://www.geocities.jp/info_sjes/newpage3.html
- (18) 加藤晴久：“憂い顔の「星の王子さま」続出誤訳のケーススタディと翻訳者のメチエ”，書肆心水(2007)